

第4章 近代和歌山の発展



戦時下の和歌山

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

市民生活

1931（昭和6）年の満州事変いらい、わが国は中国大陆への進出に力をそそぎました。やがて、日中戦争、太平洋戦争へと戦争への道に突入していきます。戦争が激しくなるとともに、食料は乏しくなり、日用品も不足して、切符制、配給制にかわり、国民の生活が苦しくなりました。石油はなくなり、貴金属や鉄製品の供出を命じられました。すべて軍事用に向けられたのです。バスは木炭車になりました。

「ぜいたくは敵だ」、「ほしがりません勝つまでは」が、国民の合言葉となりました。

健康な男性は、兵隊に出され、残された女性や老人、子どもまでが、食糧増産に空腹をかかえて働きました。運動場や道路にも、いもや麦が植えられました。

空襲が激しくなるにつれて、和歌山市では「建物疎開」がはじまりました。火事を防ぐためです。市民は住む家さえこわされるのを見ていなければなりませんでした。



食糧増産のための開墾（上富田町）

学徒出陣

太平洋戦争で負けそうになってきた1943年、旧制の中学校や高等学校の卒業が1年早められました。また、大学生や専門学校生の徴兵延期の制度も中止となり、一般の男性と同じ扱いになりました。和歌山高等商業学校や和歌山師範学校（ともに現在の和歌山大学の前身）でも、学問をやめて軍人になる学生も出てきました。

男性が20歳になると兵隊になる義務は、1年下げられて19歳となりました。さらに、1944年には満17歳以上の男子が兵役に加えられるようになりました。中学校の生徒は飛行予科練習生などの募集にも参加しました。多くの青少年はペンを銃に持ちかえて、戦場へと向かったのです。

勤労働員

日中戦争がはじまった翌年の1938年、政府は学徒に食糧増産への動員を求めました。戦争が激しくなる



につれ、国民学校（小学校）4年生以上の児童生徒も食糧増産、草刈りや堆肥づくり、荒れ地の開墾などに動員されました。

1944年には、中学校、国民学校高等科以上の学生は軍需工場で働くように命じられました。その翌年の4月からは国民学校初等科以上の上級学校は、すべて通年動員され学校は閉鎖されました。生徒は工場や駅、港の荷物運び、農家の手伝い、防空壕掘りなどの仕事にあたりました。

戦争が激しくなり、熟練工が次々と出征したため、工場では労働者が不足しました。そのため、政府は法律を定め、中等学校の4年生以上の男女生徒は授業を中止して工場で働くようになりました。和歌山師範学校や県内の中等学校の男女生徒が明石（兵庫県）の航空機工場をはじめ、各地の工場や造船所などに働きに出ました。

動員先の工場で爆撃を受けた田辺家政女学校の女子生徒11人がぎせいになるなど、死傷者さえ出しました。食糧事情も悪くたいへん苦しい仕事でしたが、勝利を信じて兵器生産に励みました。

また、軍人以外にも、軍属として召集され、工場などで働く人も大勢いました。こうして、すべての国民は戦争のために協力したのです。



灯火管制カバー
（海南市教育委員会蔵）



奉公袋（個人蔵）



防空鉄かぶと
（海南市教育委員会蔵）

和歌山大空襲

米空軍機B29は、1944年11月に西牟婁郡、翌年1月には東牟婁郡などの村々に、つづいて太地町や新宮市などに爆弾を投下しました。その後、8月15日の終戦の日までの間に和歌山県下に200回以上の空襲がありました。

なかでも、1945年7月9日の真夜中から始まった焼夷弾投下の和歌山市空襲は最大のものでした。翌日の10日まで燃え続け、市の中心部のほとんどが焼け野原となりました。焼けた家27,000戸以上、死者1,200人、負傷者4,400人を越えました。特にすさまじかったのは、汀丁の旧県庁跡の広場（現在の供養塔のある公園）でした。押しよせた炎で火柱が立ち、ここに逃げ込んだ700人以上の人々が焼死しました。この空襲で死亡した人の約60%にあたります。このときの空襲は和歌山大空襲とよばれています。

死を逃れた人々の中には、親戚や知人をたよって和歌山市から離れていく人もいました。また、紀ノ川の河原や鉄橋の下などで、バラック住まいの不自由な暮らしをつづける人もありました。

こうした多くの人命と物資を失った和歌山市民ですが、戦争が終わって平和が訪れると、やがて復興に立ちあがりました。



大空襲により焼け野原となった和歌山市内 百貨店屋上から写されたもので小高い山の上には和歌山城がありました。（毎日新聞社提供）

*1 仮りの小屋をたてて、住んだこと。